

(12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)(20) Goethe

(1966-9-27/10-25/11-1/11-8/11-15/11-29/12-13/1967-1-10/2-7)

(12)1966-9-27

Goethe の劇

1771年 Straßburg 大学を卒業した Goethe は Frankfurt に帰り弁護士事務所を開業した。しかし仕事には余り関心がない反面、創作欲が頻りに起こった。そして以前その手記を読み、剛胆で生気ある筆致に感嘆した騎士の Götz von Berlichingen(1480-1562)を主人公に Drama を書いた。これが"Geschichte Gottfriedens von Berlichingen mit eisernen Hand, dramatisiert"である。しかしこの作品は余りに戯曲の手法を無視していたので、失敗作だった。Goethe は 1772 年の春 Witzlar へ行き、そこの帝室裁判所で司法事務を見習った。ここで訴訟事件を中心に社会を観察する機会に恵まれたが、やがて Werther の事件で長くそこに留まることが出来ず、両親のもとに帰り、1773 年から 75 年までの間、心の傷を癒すため創作に熱中した。そして 73 年春に発表したのが、今日残っている Götz von Berlichingen である。これは匿名でまた自費出版であった。

この作品の内容は次のとおりである。正直で名誉心に富んだ騎士の Götz は、多くの他の騎士のように新しい秩序に従うことを望まなかった。多くの騎士の中には幼友達である Weislingen がいた。この男は Götz が争っている Bamberg 僧正に仕えていた。Götz は Weislingen を捕らえて自分の城に連れていき、条理を尽くして話合った結果、Weislingen も心を変えかつ Götz の妹のマリーエと婚約した。Götz は身の整理をするため Weislingen を Bamberg へ帰したが、Weislingen は妖婦の Adelheid von Walldorf の罠にかかり Götz との友情や誓いを忘れ、Adelheid と結婚してしまった。その間 Götz は官軍と戦って捕らえられたが、妹婿の Sickingen に助けられた。しかし後に官軍と和睦したが、やがて反乱を起こした農民軍に強要され一時農民軍の首領となることを引き受け、無軌道なその乱暴を制御しようと思った。だが官軍は Götz を騙して捕らえ、死刑の判決を下した。妹のマリーエは兄の命乞いに Weislingen を訪ねて助命を願った。その真情に打たれて Weislingen は Götz の死刑の判決書を引き裂いた。しかしその時すでに Weislingen は妻の Adelheid に唆された Franz のために毒を盛られ、マリーエに抱かれて息が絶えた。そののち Adelheid は夫殺しの罪で秘密裁判によって殺され、Götz は「おまえ方は皆おのおのの門を閉ざすよりも、一層気をつけて胸のふたを閉じておらねばなるまい。今からは虚偽の時代が来る。虚偽が勢いを得て自由に振る舞うことだろう。役立たずの者が権謀をもって政治をすれば、正直者は皆その

網にかかるだろう云々・・・」と言って死んでしまった。

以上の内容を有するドラマは、内容形式ともに画期的な作品である。この作品の意義は、完全にフランス的な趣味や傾向を退け、どの点においても国民的なドイツ民族の意識から発展したドイツのドラマだったことである。個々の人物のもつ真実さによって、作品全体が真剣なものとなり、また対照の妙も驚くほどである。例えば華麗で贅沢な **Bamberg** の僧正の宮廷生活と、**Jaxthansen** における **Götz** の城中の生活は好対照である。**Goethe** の描いた **Götz** は歴史上の人物と大いに違う。史上の **Götz** は盗賊騎士であり、盗むために盗み掠められるだけのものを掠めた。例えば彼が **Nürnberg** を攻めたのは単に掠めるためだった。また **Heilbronn** の仕立屋のために口を利き、**Köln** 市から金を取ってやったが、実に初めの額の23倍の金を **Köln** 市から出させた。農民戦争に加わったことも、実際には最初から反乱者と協同し、その後彼等を見殺しにした。そのため25000グルデンの保証金を積み **Holnberg** の城を離れない約束で釈放され、晩年は信心深くなり牧師の手に抱かれて死んだが、**Goethe** はこの人物を人間的な心情を備え、かつ革命的な考えを持ち、社会的安寧と平和を追求し、体裁ばかり整って内実は下劣な国家と、鋭く対立する人物に仕立てたのだった。この **Götz** と対照的な男が **Weislingen** である。優柔不断で分裂的であるため頼りにならない人物だが、**Goethe** はこの **Weislingen** に自分の一面を写したと思われる。というのは1773年10月 **Berlichingen** の原稿の一部を **Sesenheim** の **Friederike** に送ることを友人の **Salzmann** に頼んだとき「哀れな **Friederike** が、不実な男が毒を盛られて死んだことを読んだら、いくらか慰めを感じようだろう」と書いているからである。

Adelheit は全くゲーテの自由に作り上げた創作だが、あまりに美しいため出会う者すべてを魅惑する。**Weislingen** はもちろん、**Weislingen** の家来の **Franz** を唆して主殺しの罪を犯させたのみか、ジプシーの若者の欲望を呼び覚まし、恐れて救いを求めた **Adelheit** を助けたジッキンゲンをも籠絡し、初めの原稿では秘密裁判所の死刑執行人も彼女に魅了され、貞操と引き替えに命を助けることを申し込み、**Adelheit** が短刀で刺してきたのでかえって彼女を絞め殺すことにしていた。このように、ことに初稿はこの妖婦のことが大部分を占めていた。そのために筋の統一を乱していたので、**Herder** が冷い批評をしたのであった。これに気づいた **Goethe** は次の作品では **Adelheit** をかなり少なめに描いている。この **Adelheit** にはことにシェークスピアの影響が見られる。そこでシェークスピ

アのクレオパトラの模倣であるという人もいる。事実 **Adelheit** と **Marie** の間に **Weislingen** が存在するのは、オクタビオ及びアントニウスとクレオパトラの関係に似ている。2人とも友人の妹と婚約して結婚するが、2人とも妻を妖婦のために見捨てる。この点が **Friedrich** 大王がゲーテの **Götz** に対して、まずいイギリス劇の忌むべき模倣であると言った根拠である。またこの3統一を全く無視していることは、この作品の持つ革新的な面である。目まぐるしいまでに場面が変わり、ゲーテが後に上演できるように書き改めようとしても、できなかつたほどである。それほどゲーテは初めから上演を念頭に置いていなかった。このことをゲーテの母は、息子は **Götz** を舞台のために書こうなどとは夢にも思ったことはないのです、と述べている。またこの作品の文体はすこぶる自然で、社会を眼中に置かず、人間性を特に強調しているのが特徴である。

(13)1966-10-25

"**Götz von Berlichingen**"を書き"**Werther**"を書いた頃の **Goethe** は盛んな勢いで制作をしていた。"**Clavigo**"(1774年5月)及び"**Stella**"(1775)を完成し、そのほかに彼が手がけたドラマにはおよそ次のようなものがある。すなわち"**Cäsar**" "**Mahomet**" "**Prometheus**" "**Faust**"(Urfaust) "**Ein Fastnachtsspiel vom Pater Brey**" "**Das Jahrmarktsfest zu Plundersweilen**" "**Hanswurts Hochzeit**"及び"**Satyros**"などである。

これらの諸作の内 **Faust** を除く多くのものは断片であり、当時は印刷に付されず原稿として残され、あるいは **Goethe** が友人に朗読して聞かせたものであった。そのうち最も古いものは"**Das Jahrmarktsfest zu Plundersweilern**"で、**Hans Sachs** を真似た謝肉祭劇的な **Knittelvers** で書かれた劇詩である。これには **Goethe** の周囲の人々が滑稽化されて描き出され、その間に挿入されている人形芝居は、合理論者と信仰家に対する風刺である。

次の"**Ein Fastnachtsspiel vom Pater Brey**"も短い茶番劇で、1773年9月に完成したと言われ、その中に出てくる感傷的で信心ぶった男が、**Herder** とそのいいなずけを離間しようとしたことを描いたものである。**Brey** が **Herder** の許嫁に愛の告白をしようとしているとき、大尉がうまく **Brey** をかつぎ余所へ行かせ、**Brey** は結局かたがれて豚小屋への道を教えられ、恥ずかしい思いをして帰ってきたが、**Herder** の許嫁に出入りを差し止められるということを描いている。

次ぎの"**Satyros**"は最も長いドラマで、主人公 **Satyros** のモデルは

Herder だと言われている。彼は半人半山羊の森の神だが、脛を怪我し森の隠者に助けを求める。隠者は非常に親切に世話したが Satyros はそれに満足せず、隠者の持たない葡萄酒や果物をほしがる。また若く美しい Psyche を誘惑したが、牧師の Hermes が現れるとその Hermes と信者たちに自然の福音を説き、着物は脱ぐべきで、人は洞穴に住むべきである。習慣や道徳は守るべきものでなく、昔の黄金時代のように暮らすべきだと説教した。これはルソーに対する皮肉である。この Satyros はさらにヘルメスの妻の Eudora をも付け狙い、自分についてくる者は死罪にするぞと脅して御殿の奥に入っていった。やがて悲鳴が聞こえ、彼が Eudora に暴力を加えようとしたことがわかり、恥をかいて神の一族から身を引くこととなるが、Brey と違い傲然と立ち去るといった筋のドラマである。これは Goethe の Herder に対する感情を表している。これで Herder の他人を傷つけても意に介しない我意と皮肉と、感情陶酔と肉感的欲求との矛盾をはっきり描いているのである。

"Hanswurts Hochzeit"は Christian Reuter の"Harlekins Hochzeit"から思いついたと言われ、また Werther を笑劇化したと考えられる作品だが未完である。従って結末がどうなるべきだったかはわからない。主人公の Hanswurt は結婚式に多くの人を招待し、すべての点に満足している。しかし儀式やその他のことで、花嫁の Ursel Blausine とだけになれずやきもきしている。彼はあらゆる儀式に辛抱できない自然児らしく描かれている。その点 Werther に似ているが、Werther より実行的である。これに対立する人物は Kilian Brustfleck で、体裁を重んじ世間体を気にする人物である。以上の作品は滑稽を主とする断片であり、また小さい作品だが、滑稽な面でも自由大胆に、従来の習慣や規則を超越する人物を描こうと努めていることがわかる。当時の Goethe は疾風怒濤人(Sturm und Dränger)らしく、遺憾なく巨人天才ぶりを示している。このことは次の諸断片に一層明らかである。

"Cäsar"はストラスブルグ時代に手を着けられたが、Goethe はこの Cäsar に味方し、暗殺者と反対の態度をとった。しかし当時の彼のサークルは暴君殺戮を唱えていた関係から、これを讃美するドラマを書く気無くしたのか、この作品は完成されなかった。

マホメットのプランはシーザーより幾分進んだ。これも天才的な人格と勝利と死を描くことになっていた。偉大な人間が持つ神性を自己以外に広げようと現実と戦い、世間に働きかけようとしていくらか順応するが、そのため墮落しついに没落することにな

っていた。しかしこの作品のうち残っているのは **Mahometsgesang** だけである。これは **Ali** と **Fatime** という弟子の互いに歌う歌であって、元来師のマホメットを讃美した歌だが、これは泉の水がついに巨大な流れとなって一切を流し、世界の大洋へと注ぐ有様を歌っている。1773年にゲーテはスピノザを研究した結果、神と世界は靈魂と肉体のように一体であって、各個人は自然と等しい神の表現であるという考えに達した。そこで自己と異なる上から支配するいかなる神々も考えることが出来ず、幸福は神的な宇宙と一如となることだと思った。

この考えに立ちゲーテが創作したのが **Prometheus** である。これは短い2幕しか完成しなかった。この中に表れていることは、後にゲーテが語るように、形成と創造の喜びだけでなく、いかなる支配者にも屈しまいとする誇りであり、人生のもつものを快樂と悲哀の内に体験し尽くそうとする欲求であった。第1幕の初めに **Prometheus** はいきなり神の使いの **Merkur** に向かって「私は欲しくない、彼らにそう言うがよい！簡単だ、私が欲しくないのは彼らの意志と私の意志が対立するからだ。1に対する1だ・・・」と言う言葉は大きな自負の現れである。そして **Epimetheus** の穏やかな勧告や **Minerva** が神々を讃美し、永遠や力や英知が神々の運命であるといった言葉に対し、「私も彼らのごとく永遠だ、我らはすべて永遠である、私は存在するのだから永遠である」と答えて自分の作った群像を示し、愛らしい女 **Pandora** を作りうる自分を神々に決して劣らないと言って争った。

ここにゲーテの自主的感情や天才たる自負や自由思想があらわれている。**Prometheus** が神々に服従しないのは、神々もまた宇宙の一部にすぎないと **Prometheus** が思っているからである。**Prometheus** の創造した **Pandora** は生命を与えられ美女となって **Prometheus** の仕事場に入出入りする。彼は彼女に愛の喜びについて教え、彼女が私の心は何に憧れているのか自分でもわからないと言うのに対して、我々が憧れ、夢に望み、恐れていることをことごとく満たす瞬間がある、**Pandora** よ、それは死だと言い、**Pandora** はこれを聞いて、おお父よ死にましようと言う。心を一瞬間漲らせ、その横溢によって心を破裂させる、一切のものの総合作用としてゲーテはここに死を描いている。なおこの作品の注意すべき点は、自由な韻のない言葉を用い、巨人的反抗的内容をよく表していることである。

(14)1966-11-1

現在"Urfaust"と呼ばれる **Faust** の成立は、1774年から75年にかけてであると言われるがはっきりしない。これは原稿が断続して

長くかかったからである。何故なら Goethe が Karl Ludwig von Knebel が訪問したとき、その原稿を朗読して聞かせたところ、Knebel は友人に「彼は原稿を部屋のあらゆる隅から引っ張り出す」と知らせているからである(1774-12-23)。この原稿は Goethe が 1775 年 Weimar へ持っていったことはわかっているが、今日残っていない。しかし Luise von Göchhausen によって書き写され 1887 年に Erich Schmidt が発見したものが残っている。これは場面が 22 に分かれ、大きく 2 つの部分から成っている。第一は Doktor Faust の大学の話と学生の宴会を主に取り扱い、第二は Gretchen 悲劇である。このグレートヒェン悲劇は Frankfurt am Main の女中 Susanna Margaretha Brandt の運命が萌芽となったようである。これに Goethe の Friederike 体験が織り交ぜられ Gretchen の姿が形成された。伝統上の Faust はより高い権力を得るために悪魔に身を売ったが、Goethe の Faust はそれによって知るだけでなく、支配することも出来る知識を得ようと努力している。呼び出された知霊に対し Faust が、わしはおまえ各々から成り立つものを避けねばならぬのか、わしはそれである、Faust である、おまえと同じなんだ。忙しげに働く霊よ、なんとわしはおまえに近く感ずることよ、と言ったとき、知霊はおまえが理解している霊におまえは等しいのだ、わしに等しくはないと言って消え去り、Faust はくずおれながらおまえに等しくないのか、誰に等しいんだ、神と等しいわしがおまえに決して等しくないだって、と言うのであった。これは机上の知識に捕らわれることなく、熱情と洞察によって真の知識を得なければならぬという、ゲーテの青年時代の考えを反映している。この他にこのドラマにはメフィストフェレスが学生をからかう場面と、Auerbachs Keller の場面があり後の作品にも残っている。

以上は Sturm und Drang 時代らしい作品だが、ゲーテの成功以来、その影響で極端に無形式的な作品が多く作られるのを見て、ゲーテは大いに反省し、拘束、すなわち場所と時間の統一の守られた作品として"Clavigo"(1774)及び"Stella"を完成した。Clavigo はフランスの文士 Beaumarchais(Caron de 1732-1795)の記録、スペイン旅行断片に基づき約一週間で書き上げた。この作品は一口に言うと、主人公が悔恨を重ね、また悪意なしに人の裏切りを重ね、ついに悲劇的な死によって贖罪することを描いた作品である。すなわちスペインの作家ホセ・クラビヒオ Jose Clavijio(1730-1806)は、まだ立身しない内マドリッドのある家に預けられていた。Beaumarchais の妹マリーと婚約したが、スペイン王の秘書官になったときマリーを捨ててしまった。そこで兄の Beaumarchais がマドリッドへ行っ

て、衆人環視の中で **Clavigo** の違約を責めたので、**Clavigo** は再びマリーと婚約した。のちマリーが胸を患っているのを知って再びマリーを捨て、それを苦にしたマリーが死んだとき、**Beaumarchai** が **Clavigo** を刺し殺すという筋の作品である。これは記録の婚約そのままのところもあるが、事実と違う場面がある。その最も著しいのはドラマの終幕であって、**Clavigo** は **Beaumarchai** に刺し殺されたのではなく、実際は **Clavigo** は官職を解かれてマドリッドを追われ、マリーはこの世でその恥辱をすすがれた。ゲーテが創作にあたってことにその独自性を発揮したのは、**Clavigo** の友人カルロス (**Karlos**) という人物を創作したことである。この人物は **Beaumarchai** の記録にはあらわれぬ。**Clavigo** の名誉心を煽り、彼をして人情を蹂躪する策謀家であって、メフィストフェレスの前身だと見なす学者もある。メフィストと違い **Clavigo** に対する唆しは好意から出たもので、友人のためによいことをしようとしながら実際は悪をなす役割を担う。また **Beaumarchai** という人物は智略に長けた複雑な人物だったが、**Goethe** は高潔で熱烈な正義漢として描き、いささか単純化されているものの、当時ドイツの青年の好んだドイツ的男性に作り上げられている。ことに目立つのは妹のマリーにゲーテが、フリーデリケブリヨンの面影をあらわし、**Clavigo** を死なせることで、この女性を傷つけた自分を懲らしめていることである。この意味でこの作品も、自分の生活に根ざしたものを作り上げる **Goethe** の作品らしい。

次の作品 "**Stella**" (1776) で **Goethe** はいっそう市民世界の感情の動きと混乱を描いている。情熱家の主人公 **Fernando** は妻の **Cäcelie** とその娘を捨て、長い間愛人 **Stella** と同棲していたが、ある時妻を捜すため **Stella** を捨てて家を出たが発見できず、再び **Stella** のところへ帰ってくる。たまたま寂しさを紛らすため、**Stella** が相手になる女の人を求めていたので、**Cäcilie** の娘がその相手をすることに成り、母と一緒に **Stella** を訪問したところ、そこへ **Fernando** が帰ってきて非常に困り果てる。だが **Cäcilie** の提案でその3人が同じ家に同居するようになる。しかし後に **Stella** は毒をあおぎ、**Fernando** がピストルで自殺することが描かれている。

この作品は 1775 年の春に書かれた。それより先 **Goethe** は、その年の初め **Schönemann** という美しい少女と知り合い 4 月に婚約した。しかし家の性格の違い、その他の事情で **Goethe** は互いに強く愛し合いながら、スイスへ逃避するなどしてこの婚約を解消した。このような恋愛の苦しみがもとになってこの作品は書かれている。**Goethe** はその題をイギリスの作家 **Swift** の体験から得ている。すな

わちスウィフトには妻のほかに **Stella** と呼ぶ愛人がいたが、妻は **Stella** に対して、自分は **Swift** と結婚しているとの非難の手紙を送った。そこで作家は妻と絶交し、妻は病気になって死に、愛人の **Stella** も長く病いを得たという事情に基づく。そして男の主人公 **Fernando** のモデルには自分をあてている。

Goethe は生涯の中で数度このような二重感情に触れている。すなわち古い情熱が引かない内に、新しい情熱が心に兆すという体験である。事実 **Goethe** は **Münch** 姉妹と軽い二重愛関係にあった。しかしこの **Stella** にあらわされている **Cäcilie** には **Friederike** その他の女性の面影が解け合っており、**Stella** の性格の根本的な特徴は **Schönemann** から取った。**Fernando** はこの2人の女性の間で動揺するが、**Goethe** はさらに執事をして情熱的だったことをもって **Fernando** が偉大な人物であることを示そうとしているけれども、十分な結果を得ていない。また **Fernando** が **Cäcilie** を捨てた訳を執事に、彼の性質は束縛に絶えられないからだと説明させている。この作品は初めの原稿を見た人々にも賞賛を博したが、広く知られるにつれて、不道德性故に非難されるようになり前記の結末に改めたのである。そしてまた主要な人物は、初め **Goethe** が表現しようとしたものとかかなり隔たることになったが、その原因は彼の人間的な性質、内気、慎ましやかな性質に帰せられる。ここには **Goethe** の弱さが現れており、**Goethe** は自分の不屈な精神と偉大さを表すことをしなかったためである。

(15)1966-11-8

Goethe は 1775 年 11 月 7 日 **Weimar** に着き **August** 侯の客となった。彼はこれより先 **Lili Schönemann** との恋愛に苦しみスイス旅行をしたが、苦しみは解消せず尚苦しみ続け、**Weimar** 侯の招聘を受けたので、**Weimar** 行きを自分の胸中に住む良き **Dämon** のなすわざと感じた。これを **Goethe** は個人を動かし善にも導くが、また破滅もさせる人の力ではどうすることもできない力と見ていた。**Goethe** は初め **Weimar** に当分の間留まるつもりだったが、侯爵の知遇に感激し **Weimar** 到着後 7 ヶ月には、侯爵国の政治に参加し、ついにはその総理大臣として活躍した。この間 **Goethe** に見られる主な生活上の特徴は、**Frau von Stein** との交際と自然研究である。ことに **Stein** 夫人との交際によって **Goethe** は疾風怒濤の思想と傾向を脱し、現実主義的また人道主義的な人間になった。この夫人の面影は "**Iphigenie auf Tauris**" の主人公にあらわれている。

しかし 10 年間の政治生活に疲れ、しかも文学活動が出来ないことに嫌気がさした **Goethe** は、以前から抱いていたイタリー旅行

の考えが強まり、ついに??年6月 **Karlsbad** の静養先から侯爵宛の簡単な手紙を残しただけで、ものに追われるように急いでイタリアへ出発した。**Goethe** は若いときからギリシャ芸術の崇拜家であったが、今イタリアで古代芸術と詩人とを研究することによって、芸術の目的は単に現実生活を自然主義的に真似ることではなく、自然の理想化すなわち典雅沈静を得ようとするところにあると感じ、さらに努力と注意と知識が伴わなければ価値あるものを創作することは出来ないことを悟った。これが **Goethe** がイタリア旅行中に感得したことである。**Goethe** はこの旅行にあたり、前から手がけほとんど完成していた"**Egmont**" "**Iphigenie**"及び"**Faust**"などの原稿を携えていた。

"**Egmont**"はオランダ独立戦争当時に取材した5幕の悲劇である。**Goethe** が **Egmont** の創作に着手したのは **Straßburg** から故郷に帰った年、すなわち1770年のこととも言われるし、**Lieslotte Blumenthal** などは1773年に計画し1775年秋やっと思書始めたと言っている。この歴史劇の材料になったものは **Jesus** 会の僧侶 **Famiano Strada** の著 **De belle Belgico** と **Meteren** のオランダ戦争史であり、**Goethe** はこれらを父の家の書庫から見つけた。その中に述べられている **Egmont** 伯爵の「人間的、騎士的な大性格に心を惹かれ、劇中の人物に仕立てようと考えた」ことは、**Goethe** が後に **Dichtung und Wahrheit** の中で述べているとおりである。彼はこの人物に、当時自分にも作用している **Dämon** に駆られ破滅する人間を見た。そしてこれを描くことによって、自らはその破壊的な作用を免れたのである。この作品は知られるところでは、**Goethe** が **Weimar** 侯からの使いを待つ故郷で、最後の二三週間に大部分が出来上がった。しかし **Weimar** に入った後は多忙に加え、この作品に対する興味がなくなり、新しい材料が彼の制作欲を刺激した結果、**Iphigenie auf Tauris**(1787)が先に完成した。だが著作集を出すことになったので、ローマで同じ年に完成し、同年9月その原稿を彼の著作集の編集の世話をしていた **Herder** に送った。

このドラマはオランダで独立の気運が高まり農民の暴徒化が起こったとき、スペイン本国で、時の女総督 **Margareta von Parma** のやり方は手緩いと弾圧することになり、**Alba** 公爵が兵を連れイタリアから進軍した。これを聞き暴徒は四散し、国の有力者たちも **Alba** 公を恐れて領地に帰ってしまったが、国民に信望のあった **Egmont** 伯爵は親友 **Oranien** の忠告にもかかわらず、ブリュッセルに踏みとどまっただけでなく、進んで **Alba** 公に会い国民の自由のために弁護した。これが国王に対して従順でないという理由を与

え捕らえられた。Egmont の愛人 Klärchen は Egmont を救うため民衆を扇動したが失敗し、ついに毒を呑んで自殺した。Egmont は初め死を恐れあらゆる手段に訴え生きようとしたが、後その恐怖に打ち勝って運命に服従する決心をした。そのとき死んだ Klärchen の幻影が自由の女神となって現れ、彼の死は徒労でないことを述べて祝福した。勇気を得た伯爵は平静な気持ちで、翌朝死刑執行のため、彼を迎えに来た兵士と向き合うことを描いたものである。

このドラマが素材を歴史上の人物から取られたことは Götz と同様だが、Goethe は Egmont を全く独特な人物に作り上げた。今まで長く考えられていた、詩人は与えられた素材の劇的な加工者であるという原則を破った。歴史上の Egmont は46歳で11人の子供の父親だが、Goethe はこれを若い英雄で恋をする者であり、生への意志と高尚な気持ちを持った人物とし、自分の胸中に住む Dämon を信頼するものとして扱った。Egmont は Oliva 伯の手紙について秘書に「・・・日の駒は目に見えない霊気の鞭に打たれ、我々の運命の軽車を引いて走る。我々はただ気力を込めしっかりと手綱を握り、石を避け崖をよけ右に左に車を御して行くより他に術はない。どこへ行くのか誰も知りはない。どこから来たかそれを知る者は誰もなかろう」と言うのであった。Goethe が目指したことは Egmont の性格を発展させることだった。Schiller は悲劇的詩人に材料として役立つものは、異常な動作(Handlung)状態であり、情熱あるいは性格であると言い、Egmont をもっと国民的英雄として積極的に活動すべきものとすべきだったとして、Goethe が余りに自分に近く Egmont を描いたことを非難した。

しかし Goethe にとっては外面的な偉大さより、内面的精神の偉大さを描くことがより重大であった。Egmont に次いで精彩ある人物となっているのは Klärchen である。彼女は熱情的な女性であり純真であって、恋人を救うために真剣な努力を続けたが、成功せず自ら命を絶った。Faust の Gretchen より強い姉妹であると言われるのは当たっている。さらに彼女の母は通俗人であるが、娘が Egmont に愛されることを誇りとしながらも、Brackenburg と夫婦となって市民的幸福を受けることを切望する気持ちがよく描かれている。また Brackenburg はその愛に報いられないが、と言って彼女を捨て去ることもできない有様が Goethe の筆で生き生きと描かれている。

最後にこの作品は様式が不統一であるとの批評を免れることが出来ない。そのひとつは最後の場面で、Klärchen が自由の女神風に現れるところであるが、これは Egmont が死の恐怖を克服して得た、

立命の境地の Symbol ではあっても、一面 Goethe が様式の統一に余り注意を払わなかったことを示している。その二は用語の不統一である。ことに目立つのは、初めの部分は口語的・日常語的であるのに、終わりの方が古典主義の影響で、上品で明晰となっている。詩的色彩も豊かで律動的であることが、前の部分と対照的である。Goethe も訂正に努めたが十分に直すことが出来なかった。要するにこの作品は、Sturm und Drang の奔放な作風から古典主義文学の典雅さに至る過程を示しているところに特徴がある。

(16)1966-11-15

"Iphigenie auf Tauris"は5幕の劇である。初め1779年2月24日から3月28日の間に出来上がったのは散文劇であった。このドラマは同年4月6日に上演され、Goethe 自身が Orest を、Colona Schrötel が Iphigenie を演じ喝采を博した。しかし1780年春に抑揚格の韻文に書き改められ、さらに1781年の4月から11月までに再び散文に改められ、イタリー旅行に携えられローマで1786年中に現在のような韻文劇に改められた。

このドラマの内容は次のとおりである。

すなわち Agamemnon の娘である Iphigenie は、ギリシャ人がトロヤ(Troja)へ出征する前に Diana の神に犠牲として捧げられた。しかし女神は彼女を Tauris 島へ連れていき、ここで Diana の神殿の祭司とした。

彼女は Tauris 島へ来る外国人を犠牲として神に捧げる島人の間で寂しく暮らしていた。島の王 Thoas を感化してその残酷な風習を止めさせていたが、すっかり止めさせることは出来なかった。というのは Thoas 王が彼女に結婚を申し込んだとき、彼女がそれを拒絶したので王は怒って、その頃島の岸辺で捕らえられた2人の外国人を犠牲にせよと彼女に命じたからである。捕虜たちが連れてこられたとき、Iphigenie はいろいろと聞き出し、この者たちの一人は弟の Orest で、他の一人はその友人 Pylades であることを知った。Orest は父の敵を討って母親を殺したことから、復讐の女神に追われて気違いになったが、Apollo の神託によって、彼が姉妹を Tauris から連れて帰ったとき自由となり気違いが直るということを知り、この姉妹を Apollo の姉妹である Diana の神であると考えて、Diana の神像を奪うために友人の Pylades と Tauris 島へやって来た。Iphigenie がこのことを知ったとき、Orest はまた気違いの発作を起こした。彼女は Pylades と彼を取り鎮めた。その後 Pylades は Diana の神像を奪って逃げようというが、Iphigenie は王を欺くことは出来ないといって反対し、苦しんでいる内に Thoas 王が兵隊を引き連

れてやって来たので、彼女は王に向かって、神託によって Orest が Diana の神の像を持って帰れば呪いがとけることを告げたところ、 Thoas 王は彼女の心に打たれ Orest や Pylades を捕らえることを止めたけれども、Diana の神像を渡すことは極力拒んだ。そこで考え抜いた末に Orest が神託にいられている女姉妹とは自分の姉の Iphigenie であると解釈し、兄弟で王を説きつけて帰国の許可を得た。Iphigenie は別れに際し "So geht!" とだけいう王に対して "Nicht so, mein König! Ohne Segen In Widerwillen, scheid ich nicht von dir." と行ってその心を和らげた。"Lebt wohl" (王の最後の言葉)

この作品には粉本ともいうべき Euripides の「Tauris 島における Iphigenie」があるが、Goethe はこの作品に見られる神々の悪や残虐や嫉妬を取り去り、Orest の復讐の神からの開放を、Euripides は Apollo の神託、すなわち Diana の神像を奪い取ることにしているが、Goethe はこの劇の転換を Iphigenie の人格の力としている。Euripides では Diana の神像を盗み出す計画を立てたのは Iphigenie となっているが、Goethe はそれを Pylades の考えとしている。また復讐の神に追われている Orest は Tauris 島へやって来て、Iphigenie の力で狂気が去り、Agamemnon の家にかかっていた呪いから逃れることにしたのである。

このふたつの作品における本質的な違いは、救いの方法であると思える。

Euripides では神託に示された解決方法を、目的のためには手段を選ばないといったやり方で実行し、結局神の仲裁で解決するが、Goethe の作では策略を用いず、人間の努力と運命によって救われるという、人間と運命の関係が中心となり、また神託が最後に人間の側から解釈し直されることで、すなわち人間の場で問題が解決されている点に、この作品の特徴がある。だからこの作品の筋書き (Handlung) を動かしているのは、結局救済の問題である。この問題は Goethe の内的体験から出た自己の救いの問題であった。彼は当時運命に対する信頼、運命への感謝の気持ちを持っていた。すなわち Weimar に移ってからは、運命が自分を救ってくれるのだという感じを持ち、かつそれに感謝の気持ちを表している。これは Goethe の手紙に明らかである。一例を挙げれば「運命があなたの上に母親の手を持ってくれますように。そして運命が私を暖かく守ってくれているように、あなたをも暖かく守ってくれますように」と Johana Fahlmer に書き送り、また Stein 夫人には「私は自分を運命によって導かせることになれていますから、決して自分の中に憎しみを感じません。ただ心配のかすかな夢が、しばしば

灰かに現れることもあります。それもすぐに消えてしまいます」と書いている。こうした運命に対する信頼の念や落ち着いた気持ちは、Stein 夫人との彼の交際に関係があると思われる。

二人の詩人の描いた Iphigenie の性格は大いに異なっている。Euripides の Iphigenie は運命を憎み不幸を与えた人間に復讐しようとしている。彼女は奸智に長けて、自分の利益のためには手段を選ばない。これに反して Goethe の Iphigenie は運命を女神にゆだね、それに奉仕することを使命とし、敬虔の年や愛情や正直さや感謝の気持ちを抱いている。彼女の純潔さは人の心を和ませる。彼女が Thoas 王に犠牲を止めさせたのはこの結果である。弟の Orest の狂気を癒して Tantaliden にかかっていた呪いを解いたのは、彼女の気高い精神の力である。Pylades が欺いて Diana の神像を奪うことを提案したとき、それに反対して Thoas 王に一切を告げたのは、Iphigenie の性格が人道主義的であるからである。そこで Goethe のこの作品はギリシヤ的であるよりも、むしろ近代的人道主義的であると言うことが出来る。

Schiller は初め、人は古代の精神に吹かれるのを感じないでこの作品を読むことは出来ない云々と言ったが、後この言葉を取り消して、驚くほど近代的でかつ非ギリシヤ的であると言った。この作品の中心思想は人格の純血、すなわちその神秘的な力によって人間には救済がもたらされるということである。この作品は形式の点からいうと、ギリシヤ劇の法則に従って、いわゆる三統一(Drei Einheit)を保っている。すなわち5人の人物によって演じられ、わずかの時間に一つ所で演じられて、まとまりのある作品となり、さらに言葉の点でも古典的な落ち着きと美しさを示している。

(17)1966-11-29

"Torquato Tasso"(1789) はイフゲーニエよりもいっそう Goethe の古典劇の特色を示す5幕のドラマである。Goethe はこの作品の完成に9年以上要したが、改作に最後の3年が必要だった。そして最後にローマからワイマールへ持ち帰りそこで完成したのである。

この作品の梗概は次のとおりである。

詩人 Torquato Tasso は叙事詩 "Das befreite Jerusalem" を完成し、自分を優遇してくれる Ferrara の領主アルフォンス2世(Alfons der Zweite)に献上し、公爵の命令により公爵の妹 Leonore から月桂冠を頂いた。この時、書記官の Antonio がローマ法王庁と交渉し、Ferrara に有利な結果を持って帰ってきた。皇女 Leonore の忠告によって友誼を求めようとした Tasso を Antonio が侮辱したので、かっとなっ

た Tasso は剣を抜いて決闘を迫った。そこで Alfons der Zweite は禁を犯し宮中で剣を抜いたかどで、一室に Tasso を監禁した。一方公爵は Antonio にも詩人に対する無礼を責め、Tasso に剣を帰して彼と和解せよと命令した。Tasso は処罰を受けてみんなが自分を敵視していると思ひ違え、ついに宮廷を去ることを申し出た。そのうち益々心の乱れた Tasso は、皇女の言葉を誤解し皇女を抱こうとした。皇女は逃げ去り、他に救い手のないことを感じた Tasso は、ついに Antonio に救いを求め、Antonio も Tasso を慰め彼と握手した。

この作品の意図については次のことが伝わっている。すなわち Caroline Herder が 1789 年 3 月この作品の第一幕の写しを夫に送り、Goethe に親しいこの作品の真の意味は"Es ist die Disproportion des Talents mit dem Leben"と言ったと報告している。従来 Goethe の作品の主人公 Cäsar, Prometheus, Götz, Werther, Egmont などはすべて、才能ないし天才であり、人生との不釣り合いを感じ、それとの格闘で自分に打ち勝つ人間だった。Tasso もまたその一人であり、Goethe が身をもって体験したことを、この作品で知ることが出来ると一般に信じられていた。事実 1780 年から 81 年に渡って書かれた初稿では、政治的な問題が直接的に明瞭に表されていたので、Weimar 公爵はこの作品の制作に対し警告を発したと言われている。現在残っている作品においても、彼自身の状態と詩人の人生との戦いが暗示されている。芸術をただ装飾と考え、詩人を自分の持ち物だとのみ見なす社会に対する Goethe の批判が表されている。またここでは Tasso の dämonisch な性格が彼の運命を決定している。Tasso は運命に従う Egmont と性格的に似ているが、Egmont のように政治的ではなく、力強い作品を完成したばかりの最高の詩人である。そしてまた彼の相手になる者も、彼を滅ぼそうとする敵ではなく、詩人を引き留めようとする仲間である。Tasso は卑劣な人間や国体に対して保護されているように見えるが、Weimar 公爵が後にこの作品を偉大な芸術作品と褒めたことは、理想家が批判的なものを払拭してしまったと考えたからであろう。

このドラマの第一幕は Belriguardo の公園で演じられるが、ここでは二人の Leonore が羊飼いの扮装をして登場し、Virgil や Ariost の胸像に冠をかぶせ、あわせて彼らの詩人 Tasso を褒め讃える場面がある。彼らは Arkadien 人を演じているが、Leonore von Este の考えによれば、無制限な享楽生活でなく文化的な社会生活を Arkadien の生活は意味している。Tasso が「気に入るものが許される」というモットーを付した黄金時代の生活が、ここで強い制限を受け遊戯的な共同生活となって表されている。ここでは Sitte が支配し「適

当なものが許される」(Erlaubt ist, was sich ziemt)と述べられている。Tasso は詩人だが、また同時に詩人にすぎない。詩人ということは恵みでもあり、また呪いでもある。彼はすべて感情で生き、世界を自分に対する影響によって発見し、それを無意識的反動によってのみ判断する。彼には生と作品とは一つであり、生を詩作し、また詩を生きる。彼は出会った事柄を極端に押し広げ、一つの像を描く。詩人の冠を頂くということが彼には最高の瞬間であり、Elysium(理想郷)のビジョンを描く。ところが一方落ち目になると、自分が望んで去ることも追放と感じられ、自分を暗い気持ちで歩く巡礼と見なすようになる。同様に皇女の言葉は彼を有頂天にし、公爵の叱責は彼自身の火葬の火と感ぜられる。節度と中庸は見知らぬものであり、常に無制限に生きようとする。そこで彼は不可能なことを自分に求め、他人からも求められるようにと言われるのである。Tasso は Goethe の性格そのままをあらわしてはいないが、Goethe の持つ激情が Tasso の性格に付加されていることは疑いのないことである。

Antonio と Alfons der Zweite とは宮廷の他の人物を代表している。すなわち国家や政治や活動的な人物とかを。公爵には君主の寛容によってルネッサンス時代の専制主義が隠されているのに対し、Antonio の芸術への無理解と一面性がはっきりと現れている。このことを除けば二人の性格は似ている。そして Alfons が Weimar 公爵 Karl August を示していることは明かである。また Antonio の性格は複雑でもあるが、後に Tasso に援助の手を延ばしたことは、二人の結合によって人生での一層の飛躍が象徴されているように思われる。要するにこの作品は Goethe の内面的、芸術的發展を示す作品であり、告白的要素の濃い Goethe の作品中で最も告白的な作品ということが出来よう。

(18)1966-12-13

Goethe は 1788 年 9 月 7 日 Rudol Stadt の Lengefeld 夫人の家で Schiller に会った。Schiller は Goethe のイタリーからの帰りを待ち望んでいたが、Goethe は Schiller に接近しようとしなかった。それは Schiller が Räuber の作者として Sturm und Drang の作家であると考えていたからである。しかし 1794 年 7 月 Jena で開かれた自然科学の集会に出席した帰り道、たまたま同じ方向に帰るために話合った結果、二人の考えが一致していることがわかり、深い友情を結んだのだった。そして Schiller が編集している雑誌 Die Horen を舞台に、協力して古典主義的作品を制作した。また二人で Weimar 劇場の興隆に尽くした。なかでも二人は価値ある常備の脚本集を

作ることに力を尽くした。このため彼らは自らドラマを作ったり、あるいは他人の作品を改作したりした。そして Schiller は "Wallenstein" を作り、1798 年 10 月 2 日劇場の改築落成記念としてこれを上演した。一方 Goethe は 5 幕の「私生児」"Die natürliche Tochter"(1803)を作った。

1799 年の 11 月半ば Schiller は Goethe に、その前年の春パリで出版されたステファニー・ルイゼ・ド・ブルゴン・コンティエの自ずから表した歴史的備忘録を送った。Goethe はこれを読んで感動し、ステファニーに革命以前のルイ王朝統治下のフランス国民の典型を見たと思った。そしてこれを女主人公 Eugenie の運命として、フランス革命の原因及び革命そのものを描こうとした。

この作品の梗概は次のとおりである。

Herzog と Fürstin との間には私生児の Eugenie がおり、Fürstin が死んだとき Herzog はその娘を認知しようとした。しかし息子の手下や秘書や僧侶などが Eugenie を誘拐し、Herzog には Eugenie が馬にはねられ、あるところに埋葬されたと告げた。Herzog は非常に嘆いたが、乳母が Eugenie を港町に送り、ここからさらに湿地帯のある島に連れていき、彼女には王から自分が追放されたと思いこませた。一方市長や女司教などには王の命令だと言って、その娘を監禁させた。しかしまた連れ去られようとしたので、彼女はそれを拒んだが、自分の意志を実現するには結婚より他に方法がなく、自分を愛している誠実な法律顧問官と婚約を結んだ。

Goethe は最初この作を 5 幕のドラマに纏めようとしたが、口述してみると筋書き 2 幕分だけですでに 5 幕になってしまった。そこで 3 部曲にする計画を立て、その一部として 1803 年 4 月 2 日 5 幕の劇として作品が出来上がった。しかし 1 年経ってみると最初の部分が長すぎるように思われたので、3 部曲をさらに一つの作品に短編化する目的で初めの部分を省略し、その後を続けて書こうとしたが完成しなかった。この作品では Eugenie の運命が典型的なものとして表されるとともに、作品全体が象徴的になっている。このように象徴的なドラマであることが古典主義的な作品らしい第一の点である。もちろんこの作品もエピソードを避け、また同じ幕内で場所を変えることを避けている点や運命観を表している点では、古代作家を模倣しているようだが、象徴的になっていることが、古代ギリシャ人の知らない境地に進んでいることを示している。これは登場人物を見てもわかるとおり、女主人公 Eugenie の他は王とか公爵、伯爵、乳母というふうに階級の代表者の名前

が載っていて、個人は現れていない。場所も時も定まらず、ある典型が描かれている。このように性格も典型的形式に達することが、古代劇の研究によってゲーテが得た結論であった。Schillerと一致したのも芸術の本質は象徴であって、いっそう高いもの、一般的、人間的なものを示唆するものでなくてはならないとする点であった。この偶然なものを廃し、典型を写すことが Goethe の制作の目標だった。

しかしこの作品は不評だった。ことに Berlin でそうだった。象徴的典型的なドラマが出来るとともに、初めの目的のフランス革命よりも一般的に革命と腐敗した専制政治の有様が写し出されているのを感じさせ、見る者の感銘が薄くなったからである。従って一般人はこの作品に盛られた高い象徴性を理解できなかった。Theodor Körner はこの点から「このドラマは多数の人から嫌われるが、かなり多くの人からは理解されず、ごく少数の人から感服されるだろう」と予言し、またある者は大理石のごとく滑らかな、大理石のように冷たい文学と言ったが、一方 Heinemann はこの作品を弁護して、真に深い感情が全編を貫いているとして、不評の原因はむしろ第一に、言葉が崇高で光彩に富み驚くほど華麗だが、往々にして不自然で技巧すぎることに、第二に一定の時と一定の場所がないこと、しかし何よりも根本的にはその断片的形態のせいであるとした。とにかくこの作品は Goethe が初めて象徴的に描いた作品として意味を持っている。

Goethe の Faust は 24 歳の青年時代に着手し、82 歳で完成するまで実に 58 年間も要した文字通り Goethe の Life work である。

Goethe が Faust の制作に従った時期はだいたい 4 期に分けられる。すなわち 1773 年から 75 年までの Goethe の 24 歳の頃、40 歳前後のとき、その後 10 年経った 1787 年から 1801 年までと死の直前の数年、1825 年から 32 年までの 4 期である。

もちろん Faust の制作以前にも、また中間時代にも Goethe の思想感情がその制作に影響した。Goethe の生涯を通じて Faust の進展が見られる。Goethe が Faust 劇を知ったのは 4 歳の頃、祖母から送られた人形芝居で Faust を見たことは想像されるし、また Faust 伝説の民衆本(Volksbuch)を読んでいたことも想像される。また 15 歳のときに Gretchen に恋をしたことや、Leibzig 遊学中の体験も Faust に関係があるだろう。しかし Goethe の心の内に Faust 制作の欲求が起こったのは、病を得て帰郷し Klettenberg 嬢の影響で宗教的感

情に没入し、Paracelsus その他の神秘書に読みふけり、錬金術を試みたときに始まるということが出来る。

この欲求が実現されたものが"Urfaust"である。この原稿が Erich Schmidt によって発見されたことは前に述べた。その後 Weimar で最初の10年間には、この原稿には何の手も加えられなかった。これは宮廷生活と政治生活のためにその閑がなく、Sturm und Drang の血が静かになりつつあったので、新生活の目標が定まらない限り進展する余地がなかったからである。Goethe はこの原稿を携えてイタリー旅行に行った。「魔女の厨」(Hexenküche)がローマのある別荘で書かれ、また森と洞穴(Wald und Höhle)の場面もイタリアでの作と考えられている。イタリーから帰った Goethe は 1790 年、作品集の第7巻として"Faust, ein Fragment"を出した。しかし Goethe が努めたのは既成部分の集成であって、新しいものは何も加えなかった。それだけでなく Urfaust の最後の場面、すなわち陋屋の場面は省かれ、Gretchen が寺院で Nachbarin, Euer Fläschchen!とって気絶するところで終わっている。Urfaust にあって断片 Faust にないものは Gretchen の兄の独白(Monolog)、曇った日、夜、牢獄の場面で、変更されているのは Auerbachs Keller や Gretchen の死についての Faust とメフィストフェレスの会話などである。この断片の出版の後 Goethe はしばらく Faust を手がけなかった。Schiller が 1794 年 11月29日 Faust の原稿を見たいと行ったことから、Goethe は包みを開けて、新しく考えた部分を加え現在の Faust 第一部の形を取るよう努力した。その際 Schiller は種々の助言をし、激励した。

Goethe は 1797 年 6 月 献詞(Zueignung)とか劇場での前戯や天上の序曲(Prolog im Himmel)などを書いた。もっとも序曲は 1800 年に初めて完成した。しかし最も困難な問題は Faust とメフィストフェレスの契約の場面だった。これも Riemer の助力によって 1806 年 4 月に完成し、"Der Tragödie erster Teil"と題し作品集の第8巻として出版された(1808)。

第1部が集成されている間に、第2部の部分も考えられていた。Helena 悲劇が書かれ始めたのは 1774 年の頃らしい。1800 年夏の終わりに Goethe は Faust の死の場面を書いた。そして 9 月に再び Helena の部分を取り出し、ドイツ風の詩句をギリシャ風に改めた。その後 Schiller の死に会って一時中断したが、1808 年 5 月 Karlsbad への旅行の途中、Riemer に継続して書く意志のあることを語った。その後 1815 年この作品のことを聞いた人に Goethe が語ったところによると、かなり進行していたことがわかる。すなわち Goethe は

言うわけにはいかないが、それはもう出来上がっていて大変うまく壮大になっていると語っている。1823年6月 Eckermann (Johann Peter) が秘書になったことは、この作品の進行に大いに役立った。1825年2月25日の日記に Faust の文字が再び見られるようになった。そして Helena の場面が完成したことが記入されている。これが27年の復活祭に「古典的ロマン的幻想劇 Helena, Faust の中間曲」と題して出版された。さらに Goethe は第1部の終わりをこの Helena 劇とつなぐために努力して、現在の第2部の初めの部分を書き始め、皇帝の宮廷、仮装舞踏会などを1827年中に書き上げ、1828年春に断片のままで作品集に納めた。Goethe の生存中に出版された作品の最後のものである。さらに Goethe は同じ年から翌年の夏にかけ、第2幕と第1幕の終わりの完成に努力した。29年12月 Paris と Helena の出現を書き上げた。さらにバルギルグスノイエルに取りかかり、1830年6月25日当時イタリーにいた Eckermann にその完成を知らせている。しかしこの年の秋、息子 August の死に会い自分も11月に咯血した。しかし4日後には再び仕事に取りかかり、31年4月8日 Meyer に宛てた手紙に、全部が目の前にある、小さいところをもう少し訂正するだけだと知らせ、8月に完成した。そして今後の命を純粋な賜物と見なすことが出来る、この上仕事をするかどうか、また何をするかは結局どうでもよいと言った。8月の半ば Goethe はこの原稿を封印し、友人にも見せなかった。しかし翌1832年1月8日再び取り出し、印刷されない部分を嫁の Ottelie に読んで聞かせ29日に終わった。このときの Goethe の意図は読みながら気のついたところを訂正するつもりだったが、ついに実現しなかった。このようにして12,111行からなる大悲劇が完成した。この原稿は死後遺稿の第1巻として1832年に出版された。題は"Faust, der Tragödie zweiter Teil in fünf Akten, vollendet im Sommer 1831"である。

(19)1967-1-10

この作品は周知のごとく Zueignung, Vorspiel auf dem Theater 及び Prolog im Himmel の後に2部あって、第1部は25場、第2部は5幕23場からなる。

Zueignung は観客よりも、むしろ読者に向けられた Goethe の気持ちを表した一つの Elegie である。Vorspiel auf dem Theater は詩人の内心の要求と一般観衆あるいは劇場経営者の願望との間の隔たりを述べたもので、インドの Kalidasa の "Sakuntala" に習ったものである。次の Prolog im Himmel では Faust の根本概念が明らかにされている。このような序曲で全体の根本思想を示すことは、Goethe の

創造ではなく先例がある。すなわち Job 記の第 1 章に、神がサタンに Job の命を損ねないという条件で Job を任せることが記されている。

この場面では幕が開くと荘厳な天国の光景が展開する。神が王座につき天使らとその側に侍っている。そして 3 大天使がそれぞれ日輪の運行、昼夜の交代、及び万象が意味深い作用の連鎖をなして静かに維持されていることを讃え、これに合唱ですべて御身の崇高な身業は、開闢の日と同じく荘厳なりと荘重なリフレインを繰り返す。そこへ Mephistopheres が登場。いったい Mephistopheres は悪魔だが、神はこの悪魔をも従属者の中に加えている。その理由はメフィストは否定の霊だが、この者がいるために、得てして緩みがちな、とかくほしいままな休息を好む人間を、刺激し働かせたりすることが出来るからである。このメフィストが地上の人間についてぶりぶり言うのを聞いて、Faust はどうかと尋ねる。ここで Faust は人類の代表者となっている。そこでメフィストは、天上の一番高い星を探し求め、また地の一番深い楽しみをも究めようとしています、遠い望みも近い望みも彼の沸き返る胸には満足を与えないのですと言う。この言葉は Faust がいかなる人間であるかを示す。Faust 自身も後にふたつの魂が、ああ俺の胸に宿っている、それが互いに離れたがっていると言う。神はなるほどあれは今夢中で彷徨しているが、いつか心の澄む境地へ導いてやると言う。そしてメフィストが賭を持ち出したとき、おまえがどうしようとしは別に止めはしない、人間は努めている間は迷うものだからなど、その申し出を許す。それは Faust がたとえ暗い衝動の中でも、よく正しい道を知っていることを確信して、メフィストの企てが成功しないことを知っているからである。ここで Faust の進路は決まった。生きるために罪を犯し悪をなすことがあるかもしれないが、Faust の魂は清められ高められるのである。いわば Faust は人間として成長していく。このようにしてこのドラマの Faust は、初めの性格悲劇的構想から人間形成の神秘劇になっていった。

第 1 部の最初"Nacht"に出てくる Faust はあらゆる知識を習得し、いかなる疑惑にも迷わないが、それによって強い認識欲のため動きのとれぬ人間 Faust が満足できないのは、金銭や地位名誉といった世間的欲望が満たされないからでなく、内面的欲求が満たされないからである。魔法に頼るのは直接宇宙の秘密に触れたいと思うこと、すなわち世界を最深部で統一するものの本体を知りたいと思ったからである。Faust が Wagner と市門の外を散歩していたとき、尨犬となって付きまとい書斎に入ったメフィストは、Faust

が見せる呪文の力に耐えきれず、学生の姿になって現れ Faust を誘惑するため条件を出す。それに満足できず Faust は「おれがある刹那に向かって、止まれ、おまえは本当に美しいといえば、おれはおまえに存分に料理されていい。おれは喜んで滅んでいく。そうしたら葬式の鐘が鳴るがいい。そのとき君の奉公も終わる。時計が停まり、針も落ちるがいい。おれのすべては終わる」という。

Faust がメフィストと契約した理由は何であろうか。それはすべてを究めようとする Faust にとって、知識は持ってみて失望したものであり、また魔術による未知の世界への突入は地霊(Erdgeist)の一喝によって失敗した。残る道は実生活の享楽による他はないからである。そこで Faust は現実の生活を一つ一つ経験し、永遠の生命を探ろうとした。「歓楽は問題でない。自分の自我を拡大し人生の自我となし、人生すべてに与えられたものを自我で味わい、それによって最高のもの最深のものも自分の霊で把握するため」だった。こうしてみると Faust とメフィストの契約が、天上の序曲の神とメフィストの問答と関連していることがわかる。そのうち学生の場の後、アウエルバッハの穴倉の場(Auerbachs Keller)になる。これは Faust を現世の歓楽に沈湎させ、その向上精神やファウスト的衝動を粉碎する第一の試みである。この場は従来 of 伝説をもとにして、Goethe 自身の Leibzig 留学当時の回想を織り交ぜ、ドイツの学生生活の模様を描いてひとつの世態画としたものである。この試みは失敗に帰した。根本的に彼を造り替え悪魔の悪意に近寄らせるため、メフィストはファウストを Hexenküche へ連れていく。この場面は Wald und Höhle の場とともに、ローマの Villa borghese の庭内で書かれ、Goethe が古典主義者として従来とは全く違った立場からのものである。1788 年これを書き上げたとき、Goethe はその出来映えを喜んで、紙を・・・しさえすれば旧稿と見分けが付かないだろうと述べたといわれる。この場面では悪魔と助手が活躍し、Faust は嫌悪感に満たされ大いに怒るが、メフィストの魔法によって、鏡の中に写った美女の姿を見て思わず世にあり得ることだろうか、こうも女は美しいものだろうかと呼び、朦朧と見えるその姿を飽かず眺めるのだった。Mephistopheres は椅子に座って王様のようにだが冠がないというと、猫どもが冠を持ってきた。誤って冠を割りその欠片を持ち回りながら、これで出来た話もすれば詩も作るといっているのは、完全なものを壊す喜びを表わしたもので、王制を倒したフランス国民への風刺である。また動物が割れた冠を機械的につなぎ合わせて喜ぶのは、言葉だけを綴り合わせ思想があると思ひこんでいる詩人を風刺したものである。

この場面には他に数々の風刺が込められている。中でも魔女の勿体ぶった作法はキリスト教会の礼拝を当てこすり、猿を祭壇の両側に1匹ずつ立たせている。またメフィストに三位一体とか一位三体とか、真理の代わりに誤謬を世に広げると言わせる。これはGoetheのカトリック教会に対する考えを暗示する。ここでFaustは魔女の作った薬を飲み一挙に30も若返るのである。

Strasseから最後のKerker迄の19場が、いわゆるGretchentragödieと呼ばれる。魔女の厨を出たFaustは町でMargreteが教会から帰るのを見て、すぐに"Mein schönes Fräulein, darf ich wagen, meinen Arm und Geleit Ihr anzutragen?"という。これに対してMargreteは"Bin weder Fräulein, weder schön. Kann ungeleitet nach Hause gehn."と行って走り去る。Faustがすぐに見知らぬ少女に声をかけたのは、魔女の厨で飲んだ薬が効いたからである。このFaustの性格は余りに急変して不自然だという学者がいる。Faustの性格は根本では高貴だが、ちょっとした悪魔の誘惑でそれほど墮落するとは考えられない。だからこれはFaustが経験した享楽の種々相の隠喩と見なすべきである。そののち登場するメフィストに、Faustは"Hör, du mußt mir Dirne schaffen!"という。メフィストは"Über die hab' ich keine Gewalt!"と行ってFaustを焦らす。これは拒絶によって嗜欲を唆すためである。そしてGretchenのいない部屋へ連れていき、一層その心を煽る。無邪気で純潔なGretchenの部屋の雰囲気は、Faustにおのれの肉感性を恥じさせるとともに、愛情が心底から沸き上がるのを覚えさせた。外出先から帰ったGretchenは部屋の異常な雰囲気を感ず、蒸し暑いといいながら口ずさむ歌が、有名な"Es war ein König in Thule"である。Gretchenはこの歌のように愛し愛されることを願っていた。二度目に宝物の入っていた小箱を隣のMarthe婦人へ持っていつているところへ、訪ねてきたメフィストのお膳立てでFaustとGretchen、MephistophèresとMartheの2組が話をしながら歩くGartenという場となる。GretchenはFaustを愛し、その勧めで飲ませた睡眠薬のために母親は死ぬ。妹の墮落を怒った兄のValentinは、町でメフィストとFaustのために命を落とし、罪の意識に苦しんだGretchenはついに産み落とした子供を池に落として殺す。そのため牢獄につながれるが、その間のFaustとの恋愛の場面には、無邪気と信頼を持ってFaustを愛する彼女は美しく描かれる。ことにSternblumeの占いは写実的で美しく、Faust全体のもっとも詩的部分とされる。Gretchenが糸繰り車の側で歌う場面Gretchens Stubeの前の、森と洞穴(Wald und Höhle)でFaustは初めひとり静かに独語するが、その言葉はSpinozaの哲学と同様のもので

あり、神即自然という汎神論の美しい表現である。また次の Marthens Garten の Gretchen との対話では "Neues Glück! Herz! Liebe! Gott! Ich habe keinen Namen. Dafür! Gefühl ist alles." という信条の表白となっている。また Walpurgisnacht はメフィストが Gretchen を罪におとしめ悔恨の情しきりの Faust を、殺人罪を逃れるため一時身を隠させ、また悔悟の念を消しますます歓楽に沈めんとさせるため、悪魔が集合する Walpurgis へ案内する場面である。この場面の光景は空想的で荒唐無稽である。だが鬼火の歌う歌で速く飛ぶような旅人には、自分たちは不動で、木の方が動いていると思われるのは、汽車の窓から見る錯覚を、汽車で経験しない点で詩的である。また魔女が続々とブロッケン山に登ってくる裏で、Baubo 婆は孕んだ豚に乗ってくるが、この豚は情欲の象徴である。その他第 2 の声として、始終洗わずめで体はこんなに光っているが、生涯子供は産めないというのは、大言壮語するが創作出来ない批評家への風刺である。またここで登場する Broklophantasmust(臀部見霊者)は、啓蒙主義者 Friedrich Nicolai を皮肉ったものである。Friedrich は Witkowski の注釈によると、かつて Goethe のベルテルの悩みのパロディを発表してゲーテを怒らせた。当時すでにゲーテが自分を Faust の中で描くだらうと恐れていた。Goethe はまず風刺詩(Xenien)で彼を叩いたが、たまたま 1799 年ベルリンの Humboldt の屋敷に幽霊が出る噂が立ったとき、かつて自分が幽霊に悩まされたとき臀部の血をヒルに吸わせて、その恐怖を忘れたことを思い出し、そのことを Berlin の学士院で述べ、日刊雑誌に発表して世の笑いものになった。このことを Goethe は皮肉ったのである。

Faust はそれまで若い美しい魔女と踊っていたが、急に止めたのでメフィストが尋ねると、相手の魔女の口から赤いネズミが飛び出したという。さらに Faust は足を縛られゆっくり歩いていく女を見て Gretchen を思い出し、その運命を心配して消息を知りたがるので、メフィストは Faust を引っ張り小山の上の素人芝居を見せた。この後「曇れる日」及び「夜、広き野」の場面を経て、いよいよ牢獄の場となる。前者は唯一の散文の場面で、最も古い時代の制作である。

Faust はこの場で Gretchen の運命を知って驚き Mephistopheles が嫌になったが、あの娘が初めてでもないでしょうに、というメフィストの言葉を聞き怒りを爆発させる。Friederike を捨てたことに対する新しい悔恨の激しさが窺われ、自己仮借の苦しい心がその文の各行に滲み出ている。

牢獄の場はこのドラマの中でもっとも感動的である。気が狂い半ば無意識、半ば意識的に罪を嘆き、過去の幸福を思い出して愛人を慕う姿は、純真無垢の魂が懺悔と苦痛によって救われる道を示している。白む夜を見て早く連れ出そうとする Faust に対し、Gretchen は恐ろしい現実を予感し、私たちはまた会いましょうと言いながら、処刑の心の準備をする。さらに戸口に姿を現したメフィストを見て、はっきりと牢獄に留まり進んで断頭台に登ろうと決心した。彼女はもはや完全に罪を償った女である。しかし現実だけに目を注ぐメフィストは、彼女は裁かれたと叫ぶ。このとき天上から救われたのだという声が響き、Faust は虚しくメフィストとともに細まりゆく Heinrich, Heinrich という声を後にして立ち去る。天上からの声は、メフィストがかって言った純潔なものに対しては力がないということが実現したものである。Faust の背後から聞こえる Gretchen の呼び声は、現世を越えた愛が彼の魂を追うことを示すものであろう。

(20)1967-2-7

第2部の第1幕は Anmutige Gegend という場面で始まり、黄昏どき、花の咲く草むらに眠ろうとしている Faust の上方で、精霊の群が漂い動き、Ariel が歌い精霊が合唱する。Faust は自然の懷に抱かれて再び安息を見いだす。内心においても節度の必要を認める人物となる。広く活動するため皇帝の宮殿へ行き、ここでメフィストが財政難に悩む皇帝に紙幣の発行を勧め、それが成功して皇帝から信任される。皇帝は Faust に美の典型である Paris と Helena を呼び出してくれと言い出す。Faust はメフィストを暗い廊下に呼び出し助力を求める。否定の霊メフィストは、古代ギリシャ文化に何の関心もなく冷淡に拒絶するが、Faust が頻りに迫るのでしぶしぶその策を教える。すなわち母たちの国へ行けばこの願いは達せられると言う。母たちの国とは、すべてのものの永遠不変の原理である理念の国の意である。Faust はメフィストから、鍵をもらい下界へ下り、真っ赤に焼けている鼎に鍵を触れると、それがついてくる。無事にこの鼎を持ち帰れば、英雄でも美人でも夜の国から呼び出せると教えられ、下界へ下りていく。第7場の騎士の広場で、皇帝や廷臣どもが居並んでいるところへ、Faust が香煙を漲らせた鼎を従えて登場する。そして Faust は母たちに願を掛け灼熱した鍵を鼎に触れる。霧が濛々と部屋を覆い、やがて美しい音楽が起こりまず Paris が現れ、そこに居並ぶ貴婦人たちがその美しい姿に魅せられ、感激の声を放つとやがて Helena が現れる。彼女は女性美の典型であるだけでなく、古代ギリシャの美のシンボルで

もある。Helena は眠っている Paris に近づき接吻し退場しようとする。Paris は目覚め宮中の人々が見ている前で親しい様子を見せる。Faust は自ら呼び出した Helena の姿にうっとりする一方、Paris への嫉妬に度を失い Helena の幻影をつかむ。一方鍵を Paris の体に触れると、爆発が起こり Faust は倒れ Paris や Helena の霊は消え去り、メフィストが気を失った Faust を肩にかけて退場する。

第2幕は Faust がメフィストに伴われ、もとの書斎に帰る場面で始まる。そこではかつての助手 Wagner が有名な学者となり、レトルトの中で人造人間 Homunculus をつくっている。Homunculus とは小人の意味であって、文芸復興期の学術を象徴するものと考えられる。彼はすぐれた頭脳の持ち主で、眠っている Faust の夢を解き、この陰気な北の国では Faust は生きることが出来ないから、ギリシャに行くがいいとメフィストに勧める。そこでメフィストはちょうどギリシャのバロキルギスの夜に、魔女たちが集まることになっており、好奇心を働かせ Faust を連れて出かける。

第3場の古典的ワルプルギスの夜の舞台は、シーザーがポンペイウス(Pompejus)と決戦したファルザルス(Pharsalus)の古戦場で、時はその戦いの記念日である。この戦いを契機として古代世界がキリスト教の世界に征服されたと見られる。この場面で Goethe はいろいろな人物を登場させ、古代エジプト、東洋文化からギリシャ文明に至る過程を表わしている。Faust は大地に降ろされ目を覚ますやいなや、あの女はどこにいるかとひたすら Helena を求めるが、見いだせず Chiron に案内され予言女の Manto のところへ行く。メフィストはさらに下界の女王のところへ連れていき、Helena を Faust が連れていくことを願った。

第3幕はいわゆる Helena 劇の中心である。Helena はトロヤからスパルタへ戻り、夫 Menelas の帰りを待っている。彼女が帰ったとき宮廷の番人に、メフィストが扮している非常に醜い Phorkyas がいて、Helena の行状を責め、彼女を犠牲にせよと Menelas 王に告げられたことをうち明ける。恐れはしないが助かる手段があれば喜んで用いたいというので、Faust に Helena を近づけるため、アルカディアにやってきて国をつくっている首領が助けるであろうと、そこへ行くことを勧める。Helena は娘と一緒に北へ走り、Faust の中世風な城にたどり着き、Faust に迎えられる。Faust と Helena の取り交わす言葉が美しい音楽となって流れる。この兩人の間にやがてオイフォリオン(Euphorion)が生まれるが、この結合は古代芸術と中世の芸術との結合を象徴したものであり、Euphorion はイギリ

スの詩人バイロン(Bylon)を指している。ゲーテは Bylon を 19 世紀最大の天才詩人と見ただけでなく、近代文学の代表者と思っていた。

Euphorion は節度を知らない天才だったので、あまりに高く空へ登り、たちまち両親の足下に落ち、体は消えて衣装と外套と小さい琴だけが残った。これを見て Helena も悲しみ、その姿は消える。その着物が飛び散り雲となって、Faust を包みこみ空に飛び上がり去ってしまった。Faust の手元に残った着物は、古典的な美を表わすもので、これはギリシャの彫刻と文学に伝えられている。それを我々は保持し、これに近代的ゲルマン文化を吹き込むことが出来る。このようにギリシャ精神の遺産を受け継いでいくことが、存在する人類を高めることであると Goethe は信じたのであろう。

第4幕で Faust は山上へ着き、ここで過去に得た経験を人間の運命の改善に用いよう、かつて官能の世界から美の世界へ向上したように、道徳的感情を持ち、活動的な世界へ人間を高めねばならないと悟った。

そこへ Mephistopheles が現れて議論を始め、Faust をそうした向上的な考えから引き下ろそうと努める。Faust がこの地球には偉大な事業をする余地がある、驚嘆に値することを成就せねばならないというのに対して、絶好の機会を掴みなさいという。ちょうどその時、皇帝の位を奪おうとする者が立ち上がっていたからで、皇帝を助けるのは Faust の志を遂げる絶好の機会だからである。ここに Goethe が人類の幸福に関する考えを、象徴的に示そうとしているのが認められる。Goethe は革命的破壊作業を排斥し、合理的手段によって発展を進め、人類を徐々に確実に、よりよき社会へ進めようと考えていた。Faust は皇帝を助け、メフィストの魔法によって皇帝に勝利を得させる。

広い海岸の領主となった Faust は、海を見立てて新しい新開地を計画する。新開地の連絡を取るには、中心にある老夫婦の家を取り除く必要があった。しかしこの老夫婦はその交渉に応じないので、メフィストが家を焼き払った。このとき煙の中から4人の魔女(Mangel, Schuld, Sorge, Not)が現れ、そのうち憂愁が Faust をめくらにする。Faust は・・・

一方メフィストは死霊を使って Faust の墓穴を掘らせている。この作業の音を工事に励む部下たちの働く音であると思えばいい、Faust は工事を捗らせるためにあらゆる手段を尽くせと命ずる。そして自分の努力の結果を想像して独語する。「そうだ！わしの帰依

する考えは英知の最後の帰結で、それはこうだ。自由と生活は日々これを獲得するもので、初めてこれを味わう権利がある。ここでは危険に取り囲まれて、子供も大人も老人も健やかに年を送る。・・・わしは刹那に向かってこういうだろう。止まれ、おまえは美しいからと。この大きな幸福を予感して、わしは今最高の刹那を楽しむ」と言い終わると同時に倒れる。メフィストは自分が勝ったと思い、時計は停まったという。天使が合唱しながら下りてきてメフィストを舞台の前方へ押しやり、歌いながら Faust の霊を運んで高く登る。メフィストは Faust の霊がないのに気づき、おれはいい年をして化かされたんだ、とんだ手抜かりだったと後悔する。

最後の場面 Bergschluchten (Wald, Fels, Einöde)で、いろいろな神父(Pater)がそれぞれの考えを述べているところへ、天使が Faust の霊を運びながら漂いつつ、霊の世界の尊い一人が救われました。常に努力して骨折る者は、誰もがやがて我らに救われますと歌う。そして神なる母が漂ってくるのを見て、かつて Gretchen と呼ばれた女が神母に向かい、あの方にお教えすることをお許し下さい、まだ新しい日の光がまぶしいのですからと願うと、神母はおいで、もっと高く空へお上がり、おまえだとわかればあれは附いていくでしょうと許す。

最後に次のような天使の合唱が響く。

すべて過ぎゆくものはただ姿のみ
足らざるものここに充たされ
名づけがたいものがここでなされる
永遠に女性的なるもの我らをひきてゆく

主人公ファウストは人間としてもすぐれた個人である。いったんは享楽生活に陥ったが、美的教育と社会奉仕による人類福祉のために努力するファウストは、現代にあてはめて考えてもすぐれた人間の姿をあらわしている。

これはゲーテ自身の反映であって、ゲーテが到達した境地へのプロセスが描かれていると考えてみると、このドラマは一個の教養文学であるといえる。主人公がいったん邪道に落ちても正道を失わないところに、国と時代を超え読む者をして共感を呼ぶ理由がある。